

Title	カフカの歯：世紀転換期の或る身体像
Sub Title	
Author	石光, 輝子(Ishimitsu, Teruko)
Publisher	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集編集委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集 (2007.) ,p.41- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00000001-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカの歯

世紀転換期の或る身体像

石 光 輝 子

カフカの『変身』(Die Verwandlung)のなかで、虫に変身したのち食欲のなくなってしまったグレーゴルが、家計を潤すために家に置くことになった下宿人達が食事するさまをのぞき見る、印象的な場面がある。

それから自分たちだけになると、彼ら〔下宿人達〕はほとんど完全な沈黙のなかで食事した。グレーゴルに奇妙に思えたのは、食べるときのあらゆる様々な物音のなかから繰り返して彼らの歯の噛む音が聞こえてくることだった。まるで、食べるためには歯が必要であって、歯のない顎では最も美しい顎であっても何一つできはしないのだということ、グレーゴルに見せたいかのようなようだった。「食欲ならある」とグレーゴルは心配になりながら自分に言った。「しかしこんなものにじゃないぞ。この下宿人達の食べている様子といったら、まったくやりきれない！」[KKAD 183]

ここで何がとりわけ印象的なのかと言うと、貪欲に食物をむさぼり食らうのが尋常に人間にとどまっている下宿人達の方であって、人間から獣へと転落してしまったグレーゴルが、彼等のいわば動物的な咀嚼の音に死ぬほどの嫌悪をもよおしているということである。咀嚼能力のあるなしを決定づけているのは当然のことながら「歯」であり、害虫(Ungeziefer)に歯というものが欠如しているのは生物学的に言って理の当然であるとしても、歯がこれほど違和感をもたらす表象として、あたかも独立した事物であるかのように描出され、「歯の噛む音」の異様さが強調されているのは注目に値する。それは勿論、物音に敏感であるといったような、彼の日常生活を決してたやすいものにはしていなかったカフカの繊細な神経がもたらした表現でもあるのだが、単に、好ましくない相手の食べる様子に生理的嫌悪を覚えるといった、我々の身边にもありがちな現象を描いているので

もない。「歯」はしばしばカフカの叙述において奇妙な注視を浴びている。「歯」という表象がカフカのテキストにおいて如何なる意味を担っているのか、本論において明らかにしていきたい。

I

『変身』の下宿人達の他にもカフカのテキストには、立派な、むさぼり食らうに適した歯の所有者がしばしば登場する。『一枚の古文書』(*Ein altes Blatt*)に描かれる、町に侵入してきた北狄の民は、毎日多量の肉を食べなければ承知しないので町の人々の悩みの種となっている。

①しまいに肉屋は、少なくとも屠殺の手間を省くことができるのではないかと考え、ある朝一頭の生きた雄牛を連れてきた。それは二度と繰り返してはならない行為だった。私はまる一時間ものあいだ、作業場の一番奥の床に身をうつぶせ、あらゆる服やら毛布やらクッションやらを自分の上に積み上げて、ただただ雄牛の咆吼に耳をふさいでいた。北狄達はあらゆる方向からこの雄牛にとびかかり、生きた体から生肉を歯でもって食いちぎったのである。私が外へ出る気になったのは、静かになってからかなり時間がたってからのことだった。彼等はまるで酒樽のまわりの酔っぱらいのように、雄牛の残骸のまわりに疲れ切って横たわっていた。[KKAD 265f]

『一枚の古文書』と同じ題材に連なる『万里の長城が築かれたとき』(*Beim Bau der chinesischen Mauer*)にも同様の北狄が描写される。

②[……] 画家による事実にもとづいた一連の絵を見ると、これらの忌まわしい顔は口が裂け、顎は鋭く尖った歯を備え、ゆがんだ目はすでに獲物のほうを横目で見ており、その獲物を口でもって噛み砕き、引き裂くようであった。[KKAN I 347]

あるいは、同様の題材にもとづくと思われる、都から遠く離れた町を舞台とする断片には、町の支配者に雇われている兵士が登場する。

③これらの兵士がどこから来たのか私はよく知らない。いずれにせよ遠方であったろう。彼等はお互いにとてもよく似ていて、制服すら必要ないほどだった。小柄で、頑丈ではないが敏捷な人々で、彼等にあって最も眼を惹くのは、文字通り彼等の口をはなはだしく埋め尽くす力強い歯と、それから小さな細い目のぞっとさせるように瞬くある種のまなざしだった。このふたつによって彼等は子供達の恐怖の的であると同時に娯楽の種でもあった。

何故ならば子供達はこの歯とこの眼にぎよっとしたがるのが常であって、そうして必死に逃げ出すのだったから。[KKAN II 265]

以上の三例ではいずれも異国の蛮人が、獲物（肉）を裂くことのできる鋭く尖った強い歯を持っているのだが、それはあたかも身体に埋め込まれた凶器のようでもあって、その人間を最も強く特徴づける器官となっている。異国の蛮人ではないが、盛大な肉食を可能にする歯が注目されているのが、農夫が「わたし」を街道でつかまえて雇い入れようとする断片である。「わたし」は雇用の条件を確認しようとする。

④「下男の普通の食事で十分ですが、ただ毎日肉が食べさえできればいいのです。」「毎日だと？」と彼[農夫]は、他の条件はすべて了解したかのようにすばやく口をはさんだ。「毎日です」とわたしは言った。「君は特別な歯も持っているね」と農夫は言って、わたしの風変わりな願いを許そうとつとめ、わたしの口に手を入れて歯を触りさえした。「とても尖っている」と彼は言った。「ほとんど犬の歯のようだ。」[KKAN II 307f]

農夫は妻との仲がうまくいっていないがために「わたし」を連れ帰って仲介に使おうとする奇妙な目的を抱いているが、同様に肉食に奇妙に固執する「わたし」の要求に、農夫は相手の歯を触るという、人間相手とは思えないふたたび奇妙な反応をする。「ほとんど犬の歯のようだ」と彼は言うが、彼の行為自体もほとんど犬を相手にしているようである。①②③は自分たちと同じ人間とは思えないほど野蛮な、①で端的に示されたように動物並みの行為をする、動物にも等しい異人達の属性として歯が強調されており、④では「犬の歯」を持つ人間が描かれている。つまりこれら四つの例に見られる歯は動物の属性に他ならないのだが、当然のことながら、カフカの作品に類出する動物についてもしばしば、歯が注目されている。その最も明快な例は『ジャッカルとアラブ人』(Schakale und Araber)であろう。旅行者である「わたし」の上着とシャツをくわえて離さないジャッカルに、「わたし」が離してくれるよう懇願するのに答えてジャッカルは言う。

⑤「我々は哀れな動物であって、我々の持っているのは歯だけなのです。良いことも悪いことも、我々がしようとするものの全てにとって、我々に残されているのは歯だけなのです。」[KKAD 273]

歯は、所有物として、道具として、武器として、生存をかけるものとしてカフカの動物にとり最も大事な、言及に値するものとなる。『断食芸人』(Der Hungerkünstler)の最後に登場する若い豹の姿はきわめて印象的なもののひとつだが、その豹においても歯は身体が表現するものの中心的役割

を果たしている。

⑥そのようにも長いあいだ荒れ果てていた檻でこの野生の動物が寝返りを打つを見るのは、最も鈍い神経にすら感じられる眼の保養だった。豹には何一つ欠けていなかった。好物の餌を、監視人たちはさして考えることなく持って来た。自由すら、豹は持っているようだった。この高貴な、あらゆる必要なものはちきれんばかりに備えている身体は自由も携えているかのようだった。歯のどこかにそれは隠れているかのようだった。生きる喜びが、豹の大きく開けた口から強く燃え立ち、それは見物人には耐え難いほどだった。

[KKAD 349]

残された手稿の断片のなかにはさらにいくつかの、歯に焦点のあたる動物の姿が見られる。「秃鷹」をめぐる一連の断片のなかのひとつには次のようにある。

⑦それはいつも通りの日だった。彼はわたしに歯を見せた。わたしも歯によって掴まえられており、それから逃れることはできなかった。その歯がどうやってわたしを捉えているのか、わたしにはわからなかった。その歯は噛み合わされていなかったからである。それらの歯は二列の歯列をなしているようにも見えず、こちらに何本か、あちらに何本かしか見えなかった。わたしはそれらの歯につかまってひらりと飛び越えたかったが、しかしうまくいかなかった。[KKAN II 330]

あるいはしっぽのふさふさした奇妙な動物がいる。

⑧その獣はカンガルーに似ているが、ほとんど人間のように扁平な小さい楕円形の顔で個性がなく、その歯だけが、隠すかむき出すかという表現力を持っていた。[KKAN II 335]

あるいはシナゴグに住み着く、やはり奇妙な動物の外観は次のように描写される。

⑨それはなるほど初め見たときには恐ろしい様子で、特に長い首と、三角形の顔、ほとんど水平に前に突き出ている上の前歯、上唇の上には長くて明らかにまったく固い、明るい色の剛毛が歯の上にそそり立って一列になっており、すべては怖がらせるに足るものであったが、しかしほどなく、この見たところぎょっとさせるもの全てが無害であることがわかるのである。[KKAN II 406]

また、『巣穴』(Der Bau)の語り手は、敵を恐れて巣穴を掘り続けているが、様々な局面を想定しては不安に怯えている。

⑩[……] いずれにせよわたしは確信しなければならないのだが、ひよっとしたらどこかに、簡単にたどり着けて完全に開いた出口があって、外へ出るためにもうこれ以上作業する必要がないようになっており、そうすればたとえ簡単な盛り土であろうとそれで絶望的になって掘っているあいだに、突然 — 天よ、守りたまえ — 追っ手の歯をわたしの太腿に感じるなどという事態にはならないことになる。[KKAN II 578]

巣穴を掘る「わたし」はモグラのごとき動物／あるいはそれに近似したものと想定されうるが、そうすると追っ手である敵も、攻撃は何よりもまず歯で噛みつくという行為から始まる、動物／あるいはそれに近似したものと考えられる。このように歯は常に、動物との連想で描写されている。『城』(Das Schloß)において、Kとフリーダに部屋を提供した居酒屋のふたりの女中が彼等の口を開けて、「美しくて力強い、獣のような歯を見せて」[KKAS 154] 声もなく笑う、という場面があるが、「歯」と動物・獣が対として考えられていることがこうした表現でも認められる。

そして歯は、冒頭の『変身』の例に典型的に示されているように何よりも食物を咀嚼するための器官であり、それも肉を噛むための道具である(①②④でも同様)。次に歯と肉食の関係について考察したい。

II

①と②の引用の叙述は、肉を食べることに対する深い嫌悪感を読む者に否応なく突きつけてくる。カフカが肉食主義者であったことは良く知られた事実¹⁾に属する。彼は自分自身の身体と決して折り合いが良いとは言えず、十代の頃から強い睡眠障害、頭痛、便秘、胃痛、湿疹などの様々な身体の不調に悩まされてきた。神経症的な人間の常として医者には強い不信感を持ち、世紀転換期のこの当時もてはやされていた自然療法に関心を持って、できる限り自然に則した生活習慣によってその不調を克服しようと試み、水泳やボートや自転車やオートバイ²⁾、テニス、乗馬といったスポーツで体を鍛えようとした。その努力は決しておごりな中途半端なものではなく、水泳や乗馬は学校に通い、ボート漕ぎは自分専用のボートをモルダウ河に常備しておくほどの熱意であって、またその鍛錬の成果も(からだの不調の解消はともかくとして)技術的にはある程度見るべきものがあったようである。1909年の秋からは当時はやりのミュラー体操³⁾を採り入れて、これまた熱心に練習することになった。ミュラー体操というのは、デンマークの体育教師イェンス・ペーター・ミュラ

ーが1904年に提唱し始めた鍛錬法で、その指南書はまたたくまに二十四カ国語に翻訳されて広まったのだが、毎日十五分間、冬でも窓を開け、裸になって体操するというものである。1911年四月、カフカは出張の折りに自然療法提唱者のモーリッツ・シュニツァーと知り合って園芸作業と菜食と外気療法を勧められるが、食事はこれ以前からすでに菜食傾向にあった。もともと『断食芸人』の主人公と同様に食欲不振に陥っていたカフカは、肉も、いわゆる嗜好品（コーヒー・アルコール・煙草）も摂らない食生活にはさほどの苦痛を覚えなかったと思われる（婚約者のF・パウアーにも、自分は「生まれつき卓越した禁欲能力」を持っているのだと手紙に書いている³⁾）。しかし肉やアルコールを一切厳格に絶っていたわけではなく、日常的に少しは摂取していたようであるし、バーに通う生活を短期間おくっていたときには義務的にしろ、ワインやビールを飲んでいたようでもある。カフカは1911年秋、外気療法と菜食主義をつらぬくエルレンバハのサナトリウムで休暇を過ごし、次いで1912年の夏には当時最も有名な自然療法の指導者であったアドルフ・ユストのサナトリウム「ユングボルン」に三週間滞在した。ここは菜食はもちろんのこと、裸体で日光浴や体操をする生活を提唱し、衣服や家具など生活の細々としたところにいたるまで生活指導をする療養所である。⁴⁾ また1913年にはこれも自然療法で名の知られた医学博士クリストフ・フォン・ハルトウンゲンがひらいていたガルダ湖畔のサナトリウムに滞在した。⁵⁾ こうしたサナトリウムは結核治療のためのものではなく、主として当時の流行の病いであると同時に時代の病いでもあった<神経衰弱>⁶⁾を治療する目的の施設で、休暇ごとにあちらこちらのサナトリウムを訪れる習慣のあったのはひとりカフカに限ったことではない。ハルトウンゲンのサナトリウムにもカフカの他にH・ズーダーマンやトーマス・マンとハインリヒ・マンの兄弟、M・オッペンハイマー等も滞在客となっていた。⁷⁾ ある種の健康ブームに似た風潮が当時のとりわけ知識人・文化人のあいだにあって、それらが彼等の文学・思想にかなり大きな影響を与えていたことは、ヘッセのアスコナ・コロニー滞在⁸⁾、トーマス・マンのダヴォス体験などの有名な例が示していると言えようが、こうしたサナトリウムをめぐる身体文化の大きな流れのなかにカフカも位置していたことになる。いずれにせよこれらの事実を考慮すると、カフカは漫然たる菜食主義者ではなく非常に積極的かつ意志的に、菜食主義を取り入れていたとすることができるだろう。引用①②では、肉食は獣に等しい蛮人の行為であり、引用④では肉を食べるには普通の人間ではなく、動物の歯を持った人間でなければならなかった。肉食に対する菜食主義者の露骨な敵意と嫌悪が苛烈なまでに表現されていると言えようが、もちろんそれはカフカのうちではアンビヴァレントなものでもある。1911年9月30日の日記には次のように記されている。

ひとたび自分の胃が健康だと感じるならばほとんどいつも抱くこの欲求、食べ物についての恐ろしくも向こう見ずな行為を我が身のうちで積み重ねようとする想像。特に燻製品の前でわたしはこの欲求を満たす。ラベルが古く固い自家製ソーセージであることを示し

ているのを見れば、わたしは自分の想像力のなかでそれを口いっぱい歯の全てを用いて噛みつき、機械のようにすばやく、規則的にかつ容赦なく呑み込む。この行為が想像のなかですらただちに結果としてもたらす絶望が、わたしを急がせる。骨付き肉の長くて厚い皮をわたしは噛まずに口のなかに押し込み、そうしてそれを尻から、胃と腸を引き裂きながら再び引き出す。薄汚い食料品店のいくつかをわたしは完全に食べ尽くす。鯀やピクルスや、質の悪い、古く辛いあらゆる食べ物を自分に詰め込む。ボンボンはブリキの缶から電のようにわたしのうちに降り注がれる。そうやってわたしは自分の健康な状態を享受するだけでなく、痛みもなくすぐさま過ぎ去っていく苦しみをも享受するのだ。[KKAT 210]

食べることに對して嫌悪と拒絶がある一方で、ほとんど自己破壊的な被虐的な欲望もここには存在する。肉を自分に禁じているからこそ、欲望はそそられる。放蕩にも似た過食はしかし、ヴァーチャルな次元においてさえも絶望をもたらし、絶望は自己懲罰へと導く。口と胃と腸に突っ込まれた肉は、おのれの肉と一体化し、それを引き出すことはおのれを傷つけることとなり、飽食の快楽と同時に懲罰の快楽をも味わわせることとなる。同様に被虐的な表現が日記に記された他の断片にも見出される。

彼〔独身者〕は、自分のなるほどみすばらしくはあるがしっかりとした身体性でもって持ちこたえ、自分のわずかな食事を守り、他の人間の影響を避け、要するに瓦解してゆく世界のなかで可能なことだけを守っていれば、それでも満足している。彼は自分が失ったものを力づくで探す。それが変わってしまっても、弱っていても、以前の所有していた状態を回復するのが見せかけにすぎない（そしてたいていはそうである）としても。彼の存在はだから自己抹殺的なものであって、自分自身の肉のための歯だけを持ち、自分自身の歯のための肉だけしか持たない。[KKAT 113]

「自分自身の肉のための歯」と「自分自身の歯のための肉」しか持たないとすれば、歯は食物を摂るための身体器官ではなく、自己を侵蝕し食い破る凶器であって、本来は栄養を摂取するための行動が、正反対の自己破壊行為となる。肉を喰らうことを自分に禁じているからこそ、肉を喰らうこと自体が自己懲罰となるのである。

カフカはベルリンの女性フェリーツェ・バウアーと二年近くのあいだ膨大な量の書簡を交わして文通交際をした後、1914年六月に婚約するが、様々な思惑違いと誤解の積み重ねと懊悩の末一ヶ月ほどで婚約を解消する。婚約解消が行われたのはベルリンのアスカーニツシャー・ホーフというホテルで、当事者ふたりばかりでなく、それぞれの家族やフェリーツェの友人グレーテ・プロッ

ホ、カフカの友人エルンスト・ヴァイスなど、ふたりの関係に関与していた第三者たちも同席しており、カフカがこのホテルの場面に後に「法廷」とよんだように、ここで彼は自分が“裁かれた”と感じたのである。⁹⁾ この婚約解消劇の後、カフカは立ち会ってくれた友人エルンスト・ヴァイスと共にデンマークの海岸へ保養に行くのだが、このホテルで友人のマックス・ブロートに、自分が肉ばかり食べていることを報告している（「ぼくは婚約解消というつけを払うことになった、見せかけの強情さを放棄して、ほとんど肉ばかり食べているが、それで気分が悪くなり、眠れぬ夜のあと、朝早くに口を開けて眼をさまし、虐待され懲罰を受けた身体を自分のベッドのなかの他人の不潔なからだのように感じる。」[KKABrIII 100]）。¹⁰⁾ それはホテルで提供される食事に野菜と果物が不足しているという不本意な状況によるものであったとは言え、その状況を何とか改善しようという「強情さ」は棄てて唯々諾々と従っているのは、自ら「懲罰」という言葉を記しているとおおり、自己懲罰願望があったからである。結婚という肉の交わりを（内的意識では首尾良く）回避したカフカは、肉食にふけることによって自分の身体に苦痛（と快楽）を加え、肉食を回避していた自分を静かに罰しているのだ。¹¹⁾ 「生まれつき」禁欲能力に恵まれており、禁欲への欲望が強いカフカが、禁欲を自らに禁ずることによって自分を罰するという逆説的な構図がここに出来上がる。

III

Iですでに確認したように、歯は何よりも獣の属性として表現されていた。歯がなければ食物を咀嚼することはできない。歯は生きるための必需道具と言える。そういう意味で、歯は動物的生命力の象徴である。言うまでもなく自らのうちに動物的生命力の乏しさを認識しているカフカは、それ故にこそ人間の顔を観察し描写する際に、しばしば歯に注目している。

①ブダペストの駅で見かけたひとりの軽騎兵。「中背で、強くて大きく健康な歯、毛皮でできた上着のウエストのくびれと仕立てが彼の姿をいくらか女性的にしている。」[KKAT 736]

②講演会で見かけた男性。「進歩思想の医者、エネルギーで、強い歯。歯をむきだして[……]」[KKAT 629f]

③イディッシュ劇団の俳優について。「ピーベスについて、わたしは彼から押さえつけられているように感じたものであるから、何よりもまず、ぎざぎざのある、しみが点々とついた彼の歯の先に注意が惹かれた。」[KKAT 237]

④パリの娼婦。カフカは彼女のことを記憶のなかで思い起こして観察するのに、まず歯に眼をやっている。「彼女はすきまだらけの歯をしており、すつくと立ち、羞恥から丸めたこぶしで服をつかんでおり、大きな目と大きな口をすばやく開いたり閉じたりした。金髪

の髪はかきむしられたように見えた。彼女は痩せていた。」[KKAT 1006f]

⑤工場で働く娘達。「[……] スカートを頭の上からはき、手をできる限り洗えば、彼女たちもなんだかんだ言っても女性であり、顔色が悪く、歯が汚くとも微笑むことができ、こわばったからだを揺すり [……]」[KKAT 374]

⑥スイスの駅で見かけた少女。「出発するイギリス人の少女。歯並びがきれいにそろっている。」[KKAT 954]

⑦保養先のロストックで。「性的に萎びてしまった女たち。女たちの元々の不潔さ。[……] ひとりの太った女性を見る。彼女は籐椅子に丸くなって座り、片足を目立つ風後ろへ押しやり、何かつくろいをしていて、ひとりの年取った女とおしゃべりをしていた。その女はおそらく未婚の老嬢で、口の一方の端から常に特別に大きく歯がはみ出していた。」[KKAT 572f]

①から③の男性の歯については力強さが問題になるか、危険性（ぎざぎざのある……）、敵意、脅威に注意が向けられている。しかし④から⑦の女性の歯については、必ずしもそれがあてはまるとは言えず、明らかに色と形を問題にしているということが少なくとも指摘できるだろう。

カフカは数多くの人間の顔と身体を、特に日記において、独特の筆致で克明に描写しているが、P. v. マットはこれに注目し、それらが非常に特異で文学的にまったく新しいものであり、描かれる骨相学的特徴は、その人間の人格を解き明かす鍵ではなくてそれ自体が固有の重要性を持っているのだと指摘している。¹²⁾ 例えば後に婚約するフェリーツェの第一印象を描いた記述も、決して悪意を込めて書いているのではなく、感情を排して対象の人間性に左右されることなく描写の技巧に徹しているからだと説明する。¹³⁾ 初めて出会ったときのフェリーツェの描写とは次のようなものである。

骨張った虚ろな顔で、その虚ろさをあげつろげにしていた。むきだしの首。羽織ったブラウス。[……] ほとんどつぶれた鼻。金髪の、いくらか固い、きれいでない髪。強い顎。
[KKAT 432]

カフカがフェリーツェにどのような種類の愛情を抱いていたのかということは簡単に解き明かせる問題ではないが、たしかにこの記述が感情というものを排除していると理解しなければ、その後のカフカの行動が不可解なものとなるだろう。ここには歯に関する描写は見当たらず、顎に言及されているだけである（もちろん強い顎である）。カフカはフェリーツェの歯に関心がなかったのだろうか？ そうであるはずがない。というのはこれに先立つ1911年に、カフカは「万一わたしが四十歳にまで達するのであれば、たぶんわたしは出っ歯で、上の歯が上唇からいくらかむき出しにな

っている老嬢と結婚するのだらう」[KKAT 69]と書いているからだ。そして実際、後年に、フェリーツェの友人であってカフカがひと頃文通の相手としていた（そして明らかに、ある感情的・性的絆のあった）グレーテ・ブロッホに宛てた手紙にこう記されている。

わたしが思うに、F [フェリーツェ] は彼女のほとんど完全な金歯に比較的平静です。[……] 本当のことを言いますと、最初の頃Fの歯をまともに見ることができませんでした。それほどにこの輝く金（あるべきでないこの箇所であって、まことに地獄のような輝きです）と灰黄色の陶器に恐怖を覚えました。後には何とか耐えられるときだけ、そのことを忘れないために、自分を苦しめるために、そしてこれらすべてが本当に真実のことなのだ最終的に納得するために、意図的にその方を見るようにしました。我を忘れたときには、Fに、恥ずかしくないのかと聞きさえしました。もちろん、幸せなことに彼女は恥ずかしいとは思っていませんでした。今はしかしわたしはそのことと、たとえばただ習慣によってでなく（堅実な習慣を身につけるなんてことはわたしに全然できていないはずがないのです）ほとんど十分に折り合いをつけています。わたしはもう彼女の金歯がなくなっしてほしいとは思っていません。いやこれは正しい表現ではない、そもそもなくなっほしいと思ったことはないのです。ただ、それらが今ではほとんどふさわしく、特別にぴったりしているように思え、そして — 些細でないことには — まったくはっきりとした、好ましい、常に明示されうる、見る者にとっては決して頭から否定することのできない、人間的なあやまちのようにも思え、それはひょっとしたらわたしをFに、ある意味では恐ろしくもある、健康な歯がなしうるよりも、もっと近づけてくれるあやまちなのかもしれません。——ここにいるのは許嫁の歯を弁護する婚約者ではなくて、むしろ自分が言いたいことをちゃんと表現することのできない男であり、しかしその他に、あなたの痛みに対して何か過激なことをするしかないとするならば、いくらかあなたを勇気づけてあげようと思っている男なのです。[KKABr III 59]

「あなたの痛み」というのは、この手紙が書かれたときにグレーテ・ブロッホがちょうど患っていた歯痛のことである。ちなみにカフカーフェリーツェ—グレーテのあいだでは、しばしば歯痛が手紙の話題となった。三者とも歯痛に悩まされることが少なからずあったからである（カフカは「歯の病気というのは最も忌まわしい疾患のひとつです」[KKABr III 297]と言い切っている）。女性の顔を観察し描写するにあたって、歯については、歯並びであったり、すきまであったり、口からはみ出す大きさであったり、主として形の歪みに注意を向けていたカフカは、ここでフェリーツェの金歯と強い顎に攻撃性を感じている。美的な意味での羞恥ばかりでなく、「健康な歯」があるべきところに異物があることによって、それがそこで文字通り異彩を放っていることによって、別

種の攻撃性が生じているのだ。それはまさに、『断食芸人』において最後に出現する若い豹の、大きく開けた口から「強く燃え立つ生きる喜び」[KKAD 349]の陰画に他ならない。「地獄のような輝き」と、大仰とも思える形容をしているが、「自分を苦しめるために」それを直視するカフカは、或る意味で金歯の輝きに吸い寄せられている。豹の見学者たちは、この獣の喉から燃え立つ生きる喜びが「それにもちこたえるのが困難なほど」強い熱を放っているにもかかわらず、「自分を抑えて、檻のまわりに押し寄せ、少しも動こうとしなかった」[KKAD 349]のだが、カフカは自分に懲罰を与えてくれるフェリーツェの歯に、見学者たちが豹の歯に吸い寄せられるのと同様に、抗いがたい吸引力を覚えている。フェリーツェの金歯はその意味において動物の歯であり、生命力を顕示する表象でもある。

冒頭にあげた『変身』の歯に戻ろう。人間から獣に墮したグレーゴルは、虫であるから当然のこととはしても、咀嚼力のある歯を持たず、いわば「恐るべき健康な歯」を持つ下宿人達に食物摂取能力において劣り、生命力も明らかに弱々しい。グレーゴルの歯のない顎は食事においてのみならず、ドアの鍵を開けるなどの日常の用をはたす際にも役に立ちがたい。下宿人達に「歯のない顎では最も美しい顎であっても何一つできはしないのだ」ということを見せつけられる前に、すでにそれを思い知らせてくれる事件があった。両親達がグレーゴルの部屋の扉を開けようとして途方にくれているところで、虫の姿になったグレーゴルは何とか口を使って鍵穴にはまった鍵を回そうとする。それは高等な動物である人間としてのしるしの、高度な技をなすことのできる手をもはや使えなくなっているということ象徴的に示している事件でもあるのだが、「残念ながら彼は元々の歯を持っていないように思えた——いったい何で鍵をつかめばいいというのか——のだが、しかしそのかわり顎がもちろんとても強かった」[KKAD 132f]。その顎を使って、ぶらさがったりつかまったり全身の体重をも利用しながらグレーゴルはやっとのことで鍵を回すことに一応は成功はするものの、「疑いなくどこかに怪我をしたようで、茶色い液体が彼の口から出てきて、鍵に流れ落ち、床にまで滴る」[KKAD 133]という、生命の損失にもつながりかねない損傷を負う。これと奇妙に符号するケースが『アカデミーへの報告書』(*Ein Bericht für Akademie*)に見いだされる。今は人間社会に適応した猿のロートペーターが、かつてアフリカで人間に捕獲されて檻に閉じこめられた頃を回想して言う。檻から逃亡することは可能だったのだと。「わたしの現在の歯では、普通の胡桃を割るときも慎重にしなければならないが、当時はおそらく時間をかければ扉の鍵を噛みさることぐらいはできただろう。」[KKAD 306f] 野生の動物から人間の仲間入りをしたロートペーターはグレーゴルとはちょうど逆方向の道筋を辿っており、本来の猿の歯の力をもってすれば鍵を突破することは可能であるのに、擬似人間になりおおせた現在は、ロートペーターの歯も野生の力を失っている。ロートペーターと同じく、鍵という、行方を阻む障碍に遭遇したグレーゴルは、人間から動物の仲間入りをしたわけであるから、鍵を食い破るだけの歯を獲得していても良いはずなのに、そうではない。ロートペーターが人間の仲間入りをしたとは言え、それは所詮人間の「猿真

似]であって真の人間ではないのと同様、グレーゴルは人間の意識を保持したまま虫に変身しており、人間と動物の境界に陥った存在であると言える。動物が持つ本来の野性的力、強い生命力をグレーゴルは与えられていない。ロートペーターの歯は野性的力を失ったが、グレーゴルも人間本来の生命力を減退させており、それが「恐るべき健康な歯」の喪失として表現されている。ダーウィニズム的に見れば「進化の階段を駆け下りた」グレーゴル¹⁴⁾は、何かを獲得するのではなく、ほとんど様々なものをはぎ取られてゆくのみであり、最後には命まで失ってしまう。つまりグレーゴルは虫に変身することによって野生の生命力を持つ動物になりおおせたのではなく、滅び行く過程として、死の前段階に入っていたのであり、それを歯の欠如（と食欲の欠如）が目に見える形で表していたのだと言える。

カフカは1922年、マックス・ブロートに宛てた手紙に次のように書いている。

[……] というのは、作家の存在とは本当に書き物机に依存しているからだ。狂気から逃れようと思うならば、決して書き物机から離れてはならない。歯でしがみついても離れてはならない。[Br 386]

このときカフカは自分（作家）を動物にたとえている。書き物机にしがみつくと歯はまぎれもなく動物の歯である。何故なら、人間であるならば机にしがみつくとときには手をもってするであろうからだ。そこには動物的生命力を持つ強い歯への願望もあり、また一方で獣に自分を擬すること、動物への零落に対するいくばくかの自虐的喜びもある。狂気の淵に沈んでしまわないためには、人間から動物に転落しようとも、歯を使ってでも、書き物机にすがりついていなければならないのである。そしてまた、歯にくわえるものが食物ではなく書き物机であるということは、書くことによって生きる（書くことが糧である）というカフカの根本姿勢の形象化でもあるのだと言えるだろう。

カフカの著作からの引用は次の略号で本文中に示している。

KKABr II = Franz Kafka: *Briefe 1913-1914*. Hg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. 1999 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

KKABr III = Franz Kafka: *Briefe 1914-1917*. Hg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. 2005 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

KKAD = Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. Hg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch u. Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

KKAN I = Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Hg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1993 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

KKAN II = Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt

a. M. 1992 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

KKAS = Franz Kafka: *Das Schloß*. Hg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1982 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

KKAT = Franz Kafka: *Tagebücher*. Hg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller u. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1990 (*Schriften Tagebücher Briefe*. Kritische Ausgabe. Hg. v. Gerhard Neumann, Malcolm Pasley u. Jost Schillemeit).

Br = Franz Kafka: *Briefe 1902–1924*. Hg. v. Max Brod. Frankfurt a. M. 1966.

注

- 1) 以下、菜食主義、自然療法、運動などについては主として Peter-André Alt、Reiner Stach、Mark Anderson による。Vgl. Peter-André Alt: *Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. München (C.H.Beck) 2005, S. 204ff. Reiner Stach: *Kafka. Die Jahre der Entscheidungen*. Frankfurt a. M. (Fischer) 2002, S. 83ff. Mark M. Anderson: *Kafka's Clothes. Ornament and Aestheticism in the Habsburg Fin de Siècle*. Oxford (Clarendon Press) 1992 (マーク・アンダーソン『カフカの衣裳』三谷研爾他訳 高科書店 1997年)。またサナトリウムについては、次の文献も重要。Klaus Wagenbach: *Drei Sanatorien Kafkas. Ihre Bauten und Gebräuche*. In: *Freibeuter* 16 (1983)。
- 2) カフカはすでに1907年から叔父ジークフリート・レーヴィのオートバイに熱中して乗っていた。当時まだ初期のオートバイはオーストリア＝ハンガリー帝国全体で5387台しかない、最新の機器に属していた。Vgl. Klaus Wagenbach: *Franz Kafka. Bilder aus seinem Leben*. Berlin (Verlag Klaus Wagenbach) 1995, S. 48。
- 3) フェリーツェ宛1913年8月14日の手紙。KKABr II 261
- 4) Vgl. Adolf Just: *Kleidung und Betten in ihrem Verhältnis zur Natur*. Jungborn-Stapelburg (Just) 1910。
- 5) Rotraut Hackermüller: *Das Leben, das mich stört*. Wien-Berlin (Medusa Verlag) 1984, S. 12。
- 6) Wagenbach: *Drei Sanatorien Kafkas*. S. 77。
- 7) ibd. なおサンダー・ギルマンが⁵⁾、カフカとトーマス・マンが同じ年にこのサナトリウムに滞在したとしているのは間違いで、このハッカーミュラーの記述を読み違えている。Vgl. Sander Gilman: *Franz Kafka, the Jewish Patient*. New York and London (Routledge) 1995, p. 63. Gert Heine, Paul Schommer: *Thomas Mann Chronik*. Frankfurt a. M. 2004, S. 63ff。
- 8) ヨーロッパの文化思潮のなかに位置づけられたヘッセのアスコナ・コロニー体験については次の文献に詳しい。上山安敏『神話と科学 ヨーロッパ知識社会 世紀末～20世紀』岩波書店 1984年 235～271頁
- 9) KKAT 658ff。
- 10) 肉食をしていることは妹オットラへの葉書でも報告している。「もちろんほとんど肉料理ばかりで、忌まわしいことだ。」[KKABrIII 100] 日頃のカフカはしかし、菜食のホテルやレストランを選ぶことに細心の注意を払っている。
- 11) この婚約破棄後の肉食を、カネッティはフェリーツェとの権力闘争に関連づけて、つまりカフカはフェリーツェに対して自己を防衛するために肉食の忌避という気難しさを押し通していた、と解釈している。しかしそれはカフカの肉食への嫌悪を過小評価しているように思われる。Elias Canetti: *Der andere Prozeß. Kafkas Briefe an Felice*. München Wien (Carl Hanser) 1976, S. 80. Vgl. KKABrIII 106, 461f. また、P. エンゲルは結婚後の生活での菜食が⁶⁾、先の婚約破棄の<法廷>で問題になって

いたのではないかと推測している。Peter Engel: » *Erholen werde ich mich hier gar nicht* « *Kafkas Reise ins dänische Ostseebad Marielyst*. In: *Freibeuter* 16 (1983), S. 65.

- 12) Peter von Matt: *...fertig ist das Angesicht. Zur Literaturgeschichte des menschlichen Gesichts*. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 2000, S. 21ff.
- 13) Ebd., S. 59.
- 14) Anderson: *A.a.O.*, S. 131.